

平成 21 年度学校体育振興事業
「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践校」
研究報告書

ふりがな	いちきくしきのしりつ せいけんちゅうがっこう
学校名	いちき串木野市立生冠中学校

校長名：濱田 正光

所在地：鹿児島県いちき串木野市上名 8551 番地

電話番号：0996-32-3377

剣道文化の本質に触れ、基礎的・基本的な内容を身に付け、生徒が意欲的に学習するための指導法に関する研究

I 研究実践校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校は、いちき串木野市の北東部に位置し、校区のほぼ中央部を流れる五反田川をはさんで、水田と畑が段丘をなして広がる純朴な農村地帯にある。

生徒数は 62 名で、各学年 1 学級の小規模校である。和気あいあいとした雰囲気、学年間、男女間の仲もよい。体を動かすことが好きな生徒が多く、体育の授業や体育的行事では、一生懸命に活動をしている。部活動は、男女バレーボール部と陸上部があり、学校外のスポーツ少年団に所属している生徒も合わせれば、9 割程度の生徒が日常的に運動をしている。また生徒会活動も盛んであり、ボランティアを基軸とした活動を積極的に行っている。

2 学校の概要（平成 21 年 5 月 1 日現在）

	1 年	2 年	3 年	特別支援 学級	計	
学級数	1	1	1	0	3	
生徒数	男	10	10	10	0	30
	女	11	7	12	0	30

教員数 10 名（保健体育科 1 名）

武道・ダンスの授業の状況（平成 21 年 10 月現在）

領域；武道 領域の内容；剣道

	1 年	2 年	3 年	特別支援学級	計	
配当時間	10	10	0	0	20	
配当教員数 (外部指導者)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0	1 (1)	
生徒数	男	10	10	11	0	31
	女	13	7	12	0	32

領域；ダンス 領域の内容；(1 年；フォークダンス／2 年；創作ダンス／3 年；現代的なリズムのダンス)

	1 年	2 年	3 年	特別支援学級	計	
配当時間	10	13	10	0	33	
配当教員数 (外部指導者)	1	1	1	0	1	
生徒数	男	10	10	11	0	31
	女	13	7	12	0	32

II 研究の内容及び成果等

剣道文化の本質や基礎的・基本的な内容について、まずは教師が理解を深めるために、文献研究、剣道の先進校の授業視察を行った。その成果を添付資料のようにまとめ、剣道文化について認識を整理した上で指導を行った。その結果、95%の生徒が剣道に対する「興味や関心が高まった」と答えた。授業では、外部指導者による演武を見せたことで、「動きの綺麗さ」や「剣道の歴史の重み」が実感できたと答えた生徒たちもいた。基礎的・基本的な内容の定着のために、丁寧に時間をかけて指導した。その結果、「礼儀・作法」は 90%、「基本動作」は 81%、「面打ち」については 76%の生徒が、「できる」という自己評価をした。また、60%の生徒が「来年度もやりたい」と答えた一方で、「あまりやりたくない」と答えた生徒が 40%いた。その理由としては、「寒くて足が冷たい、痛い」がほとんどであり、実施時期について検討する必要性が挙げられた。また、事後のアンケート調査から、試合や対人動作などの発展的な内容について学習したいという意欲が強まったことが明らかとなった。

1 研究主題等

(1) 研究主題

剣道文化の本質に触れ、基礎的・基本的な内容を身に付け、生徒が意欲的に学習するための指導法に関する研究

(2) 研究主題設定のねらい

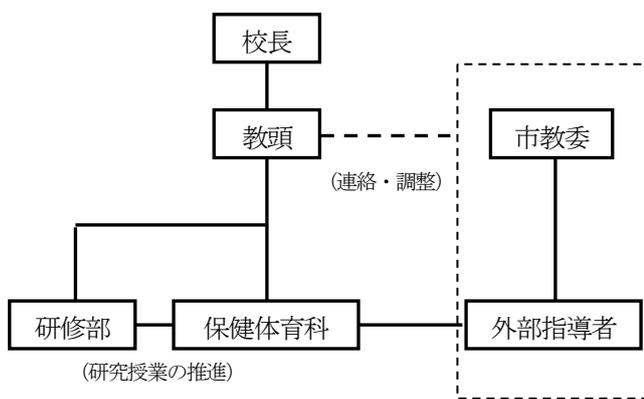
平成20年3月に告示された学習指導要領で、日本の伝統文化である武道が必修となった。

本校では、明朗で素直な生徒が多いが、人間関係に不安や悩みを抱える生徒もいる。

武道の本質に触れる学習を通して、礼儀を重んじ、自らを律する心や、他者と協調する精神、公正な態度を養うことは、豊かな人間性や社会性をはぐくむ上でも、生徒にとって大変意義深いことである。

また本校には武道場や道具がない等、武道必修化への対応が困難であったが、本事業を活用し、武道(剣道)の継続的指導が可能となった。

(3) 取組体制



(4) 主な取組

平成21年度	H21.4~7	文献研究及び先行実践調査
	H21.9	武道等地域連携推進事業事前説明会
	H21.9	剣道専門教諭(5名)へのインタビュー調査
	H21.10	外部指導者との打ち合わせ会(7回)
	H21.11	先進校視察
	H21.12	研究授業及び授業研究

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 剣道文化の本質、基礎的・基本的な内容の明確化

① 剣道文化の本質に触れさせ、基本動作に関心をもたせるためにはどうすればよいか。

② 取組

ア 文献研究及び先行実践のレビュー

書籍としては、『中学校武道の必修化を踏まえた剣道授業の展開』(財 全日本剣道連盟)、及び『新しい剣道の授業づくり』(大修館書店)を参考にした。また、これまでの剣道の学習指導について、インターネットで、10本程度の実践報告を検索した。これらの文献を参考にして、クラスター分析を行い、剣道文化の本質や、学習対象となる基礎的・基本的な内容を絞り込んだ。

イ 専門の教師へのインタビュー調査

剣道を専門とする教師たちに対して、インタビュー調査を行い、指導観や剣道の本質について聞き取り調査を行った。

ウ 先進校の授業視察

剣道専門の保健体育科教諭による、教科体育の授業を視察した。

③ 成果及び課題

文献研究やインタビュー調査を通して、礼法や作法が相手や防具に対する「思いやり」の表現であることが分かった。生徒へ指導する際にも、その意義を教師が理解した上で指導できることから、生徒の理解も深まった。また、参考資料にあるように、図で示した学習補助資料を配布し、生徒が学習中でも手軽に活用できるようにした。

表1. 剣道に対する知識(歴史や礼儀、作法)は高まりましたか?

非常に高まった	45%
まあまあ高まった	42%
少し高まった	13%
ほとんど高まらなかった	0%

(2) 学習指導の工夫

① 剣道の特性に応じて効果的に指導を進めるためにはどうすればよいか。

② 取組

ア 外部指導者の活用

基礎的・基本的な内容を確実に定着させるために、外部指導者を活用し、細やかな指導ができるようにした。また外部指導者と連携した指導により、個別指導やより充実した専門的指導が可能となる。

イ 基本動作の効果的指導

基本動作の指導を行う際に、機械的に指導するより、併せて動作や姿勢の意味も説明しながら指導した方が、より効果的に定着すると考えた。『剣道選手なら知っておきたいからだのこと』（大修館書店）を参考にして指導を行った。具体的には、二直線歩行（＝右足と左足の間を拳一個程度空ける）の意義や、中段の構えを取る際に骨盤の前傾を意識させること等を指導した。

③ 成果及び課題

学習指導では、導入の段階で、外部指導者に剣道の歴史や伝統的な行動の仕方などについて説明してもらうとともに、演武も実際にしてもらい、生徒の興味、関心を高めることができた。

（生徒感想 2009年12月3日付 南日本新聞朝刊に掲載）。

（略）講師として来られた剣道の先生は、礼法は当然で、動作もすごくまくて、きれいでした。（中略）剣道がなく、刀だけの時代を含めると何百年も受け継がれているということに歴史の重みを感じ、すごくうれしく思いました。試合だけでなく、剣道全体を楽しみ、その上で少しでも技術的にうまくなって、楽しめるような、そんな剣道になればいいなと思いました。（2年女子生徒）

また、基本動作を徹底して指導する際に、示範や個別指導の中で関わってもらうことで、生徒たちが正しい動きを確実に身に付けることができた。概観すると、外部指導者による指導により、より充実した個別指導や、専門的な指導が可能となった。結果として、以下に示すように、単元後の調査では、多くの生徒が基礎的・基本的な内容を十分身に付けられたと回答している。

表2. 礼儀、作法について

しっかりできる	14%
だいたいできる	76%
あまりできない	10%
全くできない	0%

表3. 足さばき・竹刀の振りについて

しっかりできる	23%
だいたいできる	58%
あまりできない	19%
全くできない	0%

3 研究成果の普及

今年度は、実践の初年度ということもあり、学習指導に関する研究に多くの時間を費やしたため、十分な普及活動ができなかった。一方、単元の導入段階で書いた生徒の感想が新聞に掲載され、地域や保護者の反響があった。併せて、学校だよりを通して、剣道の学習の様子を保護者や地域に知らせた。もともと、相撲や剣道など、武道が盛んな地域であるので、今後ぜひ「相撲もやって欲しい」という声や、少林寺拳法の専門家から、少林寺拳法も紹介して欲しいという要望も出された。このように、今回の剣道の学習がきっかけとなり、地域の人材が新たに発掘されるという、事業の副次的な効果もあった。

今年度の基礎的な学習を踏まえ、来年度はさらに発展的な学習を進め、竹刀を使った演武を文化祭で発表したり、授業参観の日程に剣道の学習を当てるなど、保護者や地域の方々に見てもらう機会を数多く設けたいと考えている。

また、単元後の生徒の回答では、試合に対する関心や意欲が強く感じられるものが多かった。将来的には、クラスマッチの種目として剣道を採用できるように、生徒の技能レベルを高めていきたいとも考えている。

4 今後の展望

(1) 成果

本事業による成果として、第一に挙げられるのは、外部指導者と連携した指導による学習効果が得られたことと教師にとっても日本古来の剣道文化の本質に触れる機会を持つことができたことである。

次に、学習の成果として挙げられるのは、生徒たちが剣道の本質に触れ、興味・関心をもつことができたという点である。前記の生徒の感想にもあるように、外部指導者による演武を見る体験等を通して、古来から現代社会まで脈々とつながる剣道文化に触れさせることができた。また、剣道学習終了後の授業では、体育館に入る時に自然に礼をして入館する生徒の姿も見られた。

武道の必修化の背景として「伝統と文化の尊重」が挙げられるが、下表の結果のように、剣道への興味、関心が高まったことで、今後、伝統文化を尊重する態度が生徒たちに身に付いていくことが期待される。

表4. 剣道に対する関心度

非常に高まった	45%
まあまあ高まった	32%
少し高まった	19%
ほとんど高まらなかった	5%

さらに、基本動作を重点的に指導し、生徒に「できた!」という実感を持たせることができた。単元終了後の生徒の感想には以下のようなものがあつた。

- ・ 最初は剣道のことについて何も知らなかったのに、礼儀、作法について学んだり、実際の技などもできて良かった。

- ・ すごく足が冷たかった+痛かったが、とてつもなく面白かった。楽しかった。
- ・ 最初はつまらないなと思ってたけど、技ができるようになり、だんだん楽しくなった。
- ・ 冬の学習だったので寒かったけど、防具をつけた打ち込み練習は楽しかった。

(2) 課題

「剣道の学習を来年度もやってみたいか?」という問いに対して、40%の生徒が「あまりやりたくない」と答えた。理由としては、「寒くて足が冷たい、痛い」という内容がほとんどであった。「寒げいこ」という文化を持つ武道からすると意義深いものであるが、寒さに意識が向き過ぎ、学習意欲の低下が認められたことから、実施時期について検討する必要があると言える。

また、外部指導者と連携した指導を行う際、綿密な意見交換が必要であることも感じた。外部指導者の指導に偏ると、「稽古」という側面が強くなり、生徒の興味・関心を十分に引き出すことができない場面も見受けられた。

今年度は、剣道の学習の初年度であり、生徒の中に剣道経験者が一人もいなかったことから、「剣道文化の本質に触れ、基礎的・基本的な内容を身に付ける」ことを重視した学習指導を行った。来年度は、対人的技能の指導等、3年間を見通した系統的な学習指導のあり方について研修を深めていく必要がある。以下は、来年度の学習に向けた生徒の回答である。

- ・ 相手と本当に勝負がしたい。
- ・ 防具を自分で最初から付けて、相手と打ち合う練習をしたい。
- ・ 実際の試合をやってみたい。
- ・ いろんな人と戦ってみたい。

併せて、今後は技能向上につながるウォーミングアップの方法や体ほぐしの運動など、授業の導入における学習指導のあり方についても、工夫を加え、改善を図っていききたい。